

道を貫こうとする K を動かそうと、従来の畏敬とは異なった偽りの心を持って『彼の前に跪く事を敢えてしたのです』(下 22 章)そうしてやっとのことで先生は、自分の下宿先(家)へ K を連れて行った。

それから先生は、奥さんと御嬢さんに、K のために『あたたかい面倒を見て遣ってくれ』と依頼する。そして『奥さんと御嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。全てそれを私に対する行為から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。—K が相変わらずむっちりした様子をしているにもかかわらず』(下 23 章) この時点で、まだ他人同士であった「先生」「奥さん」「御嬢さん」の三人の間に、そして先生と K の二人の間に、先生が世間と渡り合える家父長制度(長に従う家族・従者)の構造が凶らずも出来上がる。しかし自分を尊重された優越感と「ずっと畏敬していた K の力になっている」という自負心のために、先生は「金」によって間違った家制度を構築したことに気付いていなかった。奥さんの「そんな人を連れて来るのは、あなたのためによくない(家長は二人いない)」という忠告を遮ったために、「御家騒動」の素を作ってしまったのである。さらに「恋」によって、K が相変わらずの態度で示した「二人で共に向上していこう」という誓いを忘れていた事にも気付かなかった。

下宿に遷^{うつ}って来た当初『K はあんな無駄話をして何処が面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心のうちでは、K がそのために私を軽蔑している事が能く解りました』(下 25 章) そして房州の旅では『精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何だか私をさも軽薄もののように遣り込めるのです』(下 30 章) それらの「軽視」は、東京に出て「向上」を目指したことを忘れたのかという K の訴えである。先生は「恋」の一字のために、その尊い誓いをいつまでも思い出せなかった。それもそのはずである。先生にしてみれば元々力強い K の説を聞いて釣り込まれていた程度の誓いで、自分の心から湧いて出たものではなかったからだ。しかし K は先生の心を信じていた。だから親友として、二人で歩むべき向上の道に迷いをもたらす御嬢さんへの恋を告白して相談したのである。ところが先生の心は「恋」の虜になっていたため、それを見抜けなかった。そして人は残酷なものである。かつて自分に与えられた屈辱は、心の奥で復讐の機会を待っていて、好機にすると口から滑り出すのである。先生は咄嗟にかつて K が自分を遣り込めた言葉を思い出した。そして K がその言葉にどんな気持ちを込めていたかも知らずに『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』と二度繰り返した。K にはその二度の言葉が「(向上を忘れた)自分も、先生も」と聞えたことだろう。女への恋で自分の道を投げ出しそうな『僕は馬鹿だ』K は自責の念に駆られた。しかし先生はそれでもまだ気付かなかった。国家的自立(Kの親)からも、個人的自立(K)からも軽蔑されたふわついた魂を持つ自分に。そして最大の悲劇は起こった。親友である当の本人である先生からではなく、奥さんから「御嬢さんと先生の結婚が決まった」と聞いて『K はこの最後の打撃を、最も落付いた驚^{おどろき}をもって迎えたらしいのです』その一打は K と先生の道の決別を意味した。その落付きは常に「覚悟」の出来ている者の「静寂」である。

そして「恋」によって、「堅い」男の信念道を貫けないことを「薄志弱行」と任じた K は、最終の「覚悟」を決めて周囲に一番迷惑が掛からず、先生と御嬢さんの「緩い」時間が控える「土曜日の晩」を選んで自決する。その死は先生の社会的未来も封じてしまった。その日に肉体は死んだが精神を残した K と、精神は死んだが肉体を残した先生の「向上」の道は永久に閉ざされた。そして先生は明治終焉の乃木大将殉死でようやく気付く。男同士の誓いを守った「明治の精神」に。K に男の真面目な愛が

